



日々の小さな喜び

大学の教員は年齢を重ねるにつれて、自分で実験をする機会が無くなっていく。勿論、これは大学の教員だけでなく、企業や研究所で研究をしている場合も大差は無いであろう。自分のことを振り返ってみると、幸運にも(?)少し前までは実験が出来ていたが、特にこの二、三年、色々な事情から実験が出来なくなった。幸か不幸か自分の老眼も急に進み始め、ピペットマンとエッペンドルフチューブを使った作業に支障が出るようになり、丁度良い潮時だったのだと自分に言い聞かせている。その分、研究室の学生が実験している姿や実験データを見るが多くなった。その中には実験が思うように進まない学生もおり、何か励ますような前向きな言葉をかけたいのだが、なかなか良い言葉が見つからない。自分が学生だった頃のことを思い出しても、当然のごとく実験が旨くいかなかったことの方が多かったのだが、その中にも「小さな喜び」があったように思う。例えば、プラスミドの調製キットが普及していなかった時代には自分で調製した試薬を使って、プラスミドを精製していたが、キットを使わずに調製したプラスミドの純度は手技に左右されることが多い。プラスミドの純度が良くないと制限酵素処理やその後のライゲーション反応が旨く出来なかったり、DNAシーケンスをした際に配列が長く読めなかったりする経験をされた方も多いのではないだろうか。自分で調製したプラスミドを使った遺伝子組換え実験が思うように出来たとき、シーケンス解析の結

果が長く読めたときは、最終的な実験結果の如何にかかわらず、その都度、そこに小さな喜びがあり、嬉しかったことを覚えている。また、このような一連の作業がコンスタントに出来るようになると、自分の技術に自信が持てるようになり、周りからの信頼も得られ、自分の成長を感じることも出来た。さらに、その小さな喜びが積み重ねられると、研究成果という大きな喜びに繋がったのではないだろうか。最近キットを使ってプラスミドを調製し、DNAシーケンスも外注することが多く、誰かの受け売りのような気がするが「失敗しないので」、その分、小さな喜びを感じる機会が少なくなって来たように思う。むしろ、キットを使えば当たり前出来るはずのことを失敗したときの落胆の方が大きいのではないだろうか? こんなことを考えていたとき、学生時代のことを思い出した。その当時、助手(助教)をされていた先生が、おそらく誰かの実験結果を見ながらとても喜んでいて、子供のような(?)喜びようだったので、どんなに素晴らしい結果が出たのかと尋ねてみたら、ポジティブコントロールの実験が旨く出来たとのことであった。当時の私は生意気にも、心の中で「たいしたことないじゃないか」とぼやき、その姿を冷ややかな目で見てしまった。だが、そのときに一言、「実験は成功することばかりではないので、どんな実験でも成功したら、喜ぶときに喜んでおくのだよ」と言われた。私が個人的に感じていた小さな喜びは、時代の流れもあり、機会が少なくなっても仕方がないが、後者の喜びは時代が流れても変わらない。これからは学生の持ってくる色々なデータを見ながら、その中にどんなことでも良いので、小さな喜びを見出して一緒に喜んでみようと思う。ただ、自分で実験が出来なくなった私の小さな喜びはどこにあるのだろうか……。そちらの方を先に探さないと励ます方が先にドロップアウトしてしまいそうである。

(ほーぶ)